環境評価についてそれぞれ挙げているが，この3つを総合評価すると立地環境をデメリットの方が大きいと評価する事業所はごく僅かであり，周辺で多数の受注先・外注先が確保できたことがこの最大の要因である。規模が小さいゆえに可能な乗務の内容は限られているため，相互補完的な多数の取引先を確保できるような集積に依存しているということがわかる。

第5章は，大田区の工業の概要及び筆者が実際に行なったアンケート調査の結果とその分析について述べている。多くの事業者が，納品の時期や管理が厳しいことを指摘している。また，量産のきく自動車部品は海外の単価が安いものに押されて付加価値が小さく，国内での展望はないのではないかということを述べている。我が国工業の海外を含めた広域的な生産体系が進展してゆく中で，従来技術による量産加工の必要度は明らかに薄れており，都市の中小工場がこれまでの地域集積のなかで生き残ってゆくのは困難ではないだろうか。今後は，これまでの地域集積の優位性（多品種小量・高難度な加工にも対応できる技術と多様性を生かした不定期的・単発的需要への対応）を残しながらも，新たな技術集積を生みだしてゆくことが必要である。これには大企業の中小企業への人材交流・資本援助などが必要不可欠（選別になりがちだが）であり，これによってレベルアップした中小企業の技術を今度は大企業が利用するという，互いが垂直となった技術の集積が大切である。地域集積による中小企業同志のこれまでの交流を残しながらも，大企業・中小（零細）企業を越えた相互交流が，新たな技術集積に大きな役割を果たすであろう。

東京の場所イメージ

—都内大学生の手描き地図を手がかりにして—

鳥　田　千　洋

（掲載論文）

花祭りの再生とその背景

—開拓地豊橋市西幸町周辺を事例として—

倉　光　ミナ子

「伝統」という言葉は，不変でかつ固定的なものを指す言葉として様々な場面で使われている。しかし，実際の「伝統」は創り出されたり，変化したりする。では，私たちは，一体何を「伝統」と呼んでいるのだろうか。

本論文は，このような関心から，愛知県豊橋市の開拓地において行われた花祭りを事例に，その再生過程を追い，花祭りを再生させた背景を分析し，さらにそこから「伝統」が「伝統たらしめられる」側面を考察することを目的としている。

研究の方法は，フィールドである愛知県豊橋市西幸町とそこの入植者の故郷である愛知県北設楽郡豊根村における聞き取り調査と，二次的な資料を基にした。

再生された花祭りは，北設楽郡を中心に数百年という長い間，続けられて来た冬の祭りであり，山村地域という厳しい生活環境下では，一年の内の最大かつ唯一の祭りでもあった。また，花祭りには，集落の共同意識を強める役割も見られ，集落の社会構造や上下関係そのものが現れてもいた。

豊根村からの豊橋市・高師原への集団入植は，第二次世界大戦直後，食糧不足・耕地不足を背景に，「豊根村分村計画」として開始された。開拓作業は組合（農協）を中心に行われた。形成された開拓集落は，依然として行政村としてより，集落ごとの結びつきが強かった豊根村の状況をその

まま反映し，その集落単位で共同に生活し，作業が進められていた。従って，この地区は，他の開拓地に比べると，統合・結合性の高い地域になった。

開拓地での花祭りは，豊根村の分地集落の祭り道具を譲り受けたことをきっかけに開始される。祭り形式は，豊根村の祭りをベースにし，そのしきたり等を保持してきた所もある。しかし，異なる集落が入植している開拓地でもあったので，各集落の舞いを集大成したり，独自の祭り組織を設置したりして，当初から御幸神社だけの独特な性質を持った花祭りが展開されてきたと言える。

花祭りを再生した背景の一つには，祭り道具の譲られたという事実が大切であった。というのは，花祭りの中心である鬼舞いが村人の崇拝対象であり，祭りを行う為には面という象徴が必要だったからである。もう一つの背景には，花祭りが村人に生まれながらにして習得されていくものであったことが挙げられる。つまり，彼らは当然の事として花祭りを行い，普段はその意味を考えたりはしなかった。そして，このような花祭りの持つ身体性が，開拓地での花祭りの再生を促したとも言えるだろう。

まとめに，花祭りが「伝統」として語られた場合を分析すると，後継者問題の時と村人以外の人に花祭りが重要であると言われた時であった。ここから，「伝統」が「伝統たらしめられる」側面には，その存続が危ぶまれる状況や外部者の視点によって価値付けられる状況があると思われる。しかし，花祭り自体，非常に特徴のある事例であるので，さらに他の事例も調査する必要がある。従って今後は，世代による「伝統」の捉え方の違い，「伝統」と社会構造の変容との関連性などの視点もふまえて，さらに「伝統」というものを考えていきたい。

日系社会における
エスニック・アイデンティティとエスニック・シンボル

—カナダ，バンクーバーを事例として—

佐　藤　純　子

（掲載論文）

自動車交通量と気温の定量的考察

—東京都練馬区南田中の自然交通量データを用いて—

大道寺　美　保

都市において，ヒートアイランドが形成されていることが明らかになっている。ヒートアイランドの要因として，建築物の高密・高層化，道路の舗装化，人間による人工排熱の放出の増大が挙げられる。

本研究では，要因の１つである人工排熱，特に自動車交通による排熱に焦点をあて，自動車交通量を排熱の程度を表す指標として仮定し，自動車交通量の大小がヒートアイランドの都市キャノピー層内の気温変化に影響しているかについての定量的考察を行った。

交通量のデータは東京都より入手した。都は都内22箇所で交通量を計測しており，その中からフィールドとして環８沿いの１地点（練馬区南田中）を選定した。気温のデータについては，計測器付近の環８の歩道，比較対照地点として中学校，小学校で８～10月の間実際に連続観測を行ったものを使用した。

まず全体の変化を要因別に考察した。具体的には，